Osaka University Knowledge Archive

Title	伝国冬本源氏物語の世界 ： 藤裏葉巻をめぐって
Author(s)	越野, 優子
Citation	詞林. 2004, 35, p. 59-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67516
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

伝国冬本源氏物語の世界

―藤裏葉巻をめぐって―

越野　優子

はじめに

源氏物語の研究史に於いて、平成十四年十月の『源氏物語別本集成』（伊井春樹・伊藤鉄也・小林茂美編　おうふう）の完成は極めて大きな出来事であった。これに拠って、我々はこの物語が全巻に亘って知られざる豊潤且つ放逸な世界を有する事実に、包括的に接する事が可能となったからである。源氏物語の〈別の物語世界〉については既に先学諸氏の様々なアプローチがありはしたが[1]、『別本集成』完成に拠って、この物語の世界を兎角唯一無二としがちな〈幻想〉が打ち砕かれる傾向に、一層拍車が掛けられたと言うべきであろう。

稿者はこうした状況の中、別本とされる伝国冬本に着目し考察を進めている。伝国冬本とは、歌人として知られる津守国冬の筆とされる鎌倉末期成立の十二巻十二冊と室町末期成立の四十二巻四十二冊計五十四巻五十四冊から成る、別本と類別される伝本のことであり、現在は天理大学附属天理図書館が貴重書として蔵書している。本文状況としては、十八巻にも及ぶ錯簡・脱落を有し、そうしたことからも解明が遅れては来たが、最古の本文とされる絵詞との類似が指摘される巻巻もあり、そして鎌倉末期本十二冊については、この時期には稀な一筆であること等、極めて重要な伝本であることも事実である。『源氏物語大成』（二十五巻採用）・『別本集成』（三十九巻採用）は対照本文であるが、平成八年から『本文研究　一～五』で始まった翻刻（現時点で桐壺～薄雲巻まで）を併せることによって、国冬本の翻刻活字は五十四帖全て閲覧可能になった。長文の独自本文も掲出され、解明が急がれる伝本の一つであると言えるであろう。

本稿は、今後閲すべき事項として留意しつつ、紙幅の都合で触れるに留めておいた点に本格的に焦点を据え、論じていくこととする。藤裏葉の巻の次の一首を発端に始めよう。

一　伝飛鳥井頼孝卿書写国冬本の和歌の諸相を巡って
―藤裏葉巻以外

【国冬本】

しくれさへわきかほにむらさきの雲にまかへるきくの花
くもりなきよのほかとそ見　ときこへありけれとゆふ
（天理図書館蔵　三十丁ウ10～三十一丁オ2）

※「見」と「ときこへ」の間に一字分空白あり。
保坂本―「くも」に「き」のなぞり・「も」の補入

【大島本】

しぐれ、おり知り顔なり。
むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星か
とぞ見る
時こそありけれと」聞え給ふ。　（③一九七）[2]

掲出箇所については既に別稿で触れた通り[3]、大島本（以下注（2）の趣旨に依り「通行本文」と称する）が「むらさきの雲にまがへる」の一首を和歌記述の慣例通り改行・字下げで書写しているのに対し、国冬本では一首が地の文に完全に混入している。更に傍線を附した第四句が異なっている。

藤裏葉巻は脱落・錯簡がない良い状態の本と思われるが、和歌は全丁に亘って字下げの形態はなく、二十首の内、六首地の文に完全に混入している。但しこの内三首は次の地の文との間に一字の空白が置かれている。恐らく独特の方法で地の文と和歌とをよく区別していない、更に、こういった物語の類を写し慣れていないようにすら感ずる[4]」という意見もあるが、藤裏葉巻の書写者と伝えられる飛鳥井頼孝卿は、他に末摘花・関屋・若菜下・御法・夢浮橋巻の書写者としても名前が挙がっており、このうち例えば末摘花・関屋巻を見ると改行・字下げは普通に行われており、そうなると必ずしも書写者固有の問題とは言えなくなってくる。更に藤裏葉巻二十首のうち、地の文混入の歌は6番目の歌、他は16番目～20番目の歌となる。巻の終わりの方に集中していることから考えると、この巻に関しては、書写を続けるうちに疲れが出て、あるいは時間に迫られるような状況が発生するかして、徐々にいい加減になってきたとも考えられてくる。しかし本章冒頭に挙げた歌は終わりに近い18番目のものだが字下げはないものの一字空白にして地の文に繋げ、何とか地の文との区別を付けている。僅かに、二条・冷泉と並び称せられる歌道師範飛鳥井家出身頼孝筆と伝えられるだけの拘りをこの書写本は見せていると言えようか。以上見てきたように、これが国冬本藤裏葉巻の和歌に関する書写状況の実際のところではないかと思われる。

さて、次に歌の内容に入ろう。国冬本藤裏葉巻の二十首のうち四首に於いて独自歌句が見られる。以下に列挙する。参

考までに二十首中の何番目の歌かアラビア数字で番号を付すこととする。その後で通行本文の同じ箇所の歌も列挙することとする。『常用源氏物語要覧』（中野幸一編　武蔵野書院　平成七年）の「作中和歌一覧」を参照し同書の△＝物語二百番歌合入撰歌、○＝風葉和歌集入撰歌、◎＝両集入撰歌という印も借用させて頂いた。国冬・大島本との相違部分には傍線を附した。他伝本の独自本文についてはある場合は明記することにしたが、通行本文も含め表記レヴェルのみの相違は無視した。

【国冬本】

4　いく返つゆけき秋をすくしきてはなのひもとくおりにあふらん　△

（天理図書館蔵藤裏葉巻　九丁オ5～6行）

5　たをやめのそてにまかへるふちのはなおる人からや色もまさらむ　○　（同　九丁オ8～9行）

10　かさしてもたとらるゝ草のなはかつらをまちし人やしるらん（同　十八丁ウ1～2行）

※「かさしても」の直後、「かつ」のつぶれた二語あるか

18　むらさきの雲にまかへるきくの花くもりなきよのほかとそ見　（同　三十丁ウ10行～三十一丁オ2行）

【大島本】

4　幾夕霧かへり露けき春をすぐしきて花のひもとくをりにあふらん　（③一八二）

5　たをやめ（かしは木婦人）の袖にまがへる藤の花みる人からや色もまさらむ　（③一八二）

10　かさしてもかつたとらるゝ草の名はかつら（藤内侍すけ）（拾久方の月のかつら）をおりし人やしるらん　（③一八八）

18　むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る　（③一九七）

伝国冬本は巻によって様々な顔を見せる。伝承書写者が非連続的に総計十五名にも及び鎌倉末期から室町末期までの時間の幅があることでヴァリエーションのある世界を持つということもあろうが、同一筆者であっても、即ち、注（3）でも述べ前章でも述べた通り、伝飛鳥井頼孝卿筆の六帖のうち文意に関わる字句レヴェル以上の独自本文を、本章で挙げた和歌以外にも様々にもつものはこの藤裏葉巻のみである。それ以外の五巻即ち、末摘花巻（和歌全十四首）・関屋巻（以下同全三首）・若菜下巻（全十八首）・御法巻（全十二首）・夢浮橋巻（全一首）では、特段すべき独自本文を持たない。和歌も通行本文と異なる歌句はあるが、特筆すべきものはない。以下に先掲の藤裏葉巻の凡例に則り、通行本文の和歌との相違を見せたもののみ、その巻毎の和歌の全首のうちの何番目かをアラビア数字で示し、列挙してみた如くである。

【国冬本】

末摘花（全十四首）

11　なつかしきいろともなし（は）になにゝこのすゑつむはな

を袖にふれけん　（『本文研究　2』35オ）

関屋（全三首）

3　あふさかのせきやいかなるせきなれはしけきなけき
のなかをわけけん（くらん）　（『本文研究　5』5ウ）

※河内本・平瀬本―わけけん

若菜下（全十八首）

5　住吉の松に夜ふかくおくしもは神のかけたるゆふか
つらかも　○
（『源氏物語別本集成』分節番号 351869 ～ 351877）

※横山本・池田本・河内本・保坂本・阿里莫本・陽明文庫本・中京大本―「住の江の」

7　はふりこかゆふたちまかひおくしもはけにいちしけ
き神のしるしか　（同　351901 ～ 351910）

※池田本・阿里莫本・中京大―「うちはらひ」

13　きえとまる程やはふへきたまさかのはちすの露の
かゝるはかりを　○　（同　358521 ～ 358527）

14　ちきりおかん此世ならてもはちすはの玉ゐる露に心
へたつな　（同　358529 ～ 358534）

※「はちすはの」の「の」が「に」のなぞり

18　あまふねにいかゝは思おくれけんあかしのうらにあ
さりせし君　（同　35 A 060 ～ 35 A 065）

※三条西家本・河内本・阿里莫本・中京大本―「あさり」

【大島本】

末摘花

11　なつかしき（源氏）色ともなしにしなにこのすえつむ花を（万　よそにのみみつやこらん紅の末つむ花の色にいてすとも古今　人しれすおもへはくるし紅の末つむ花の色にいてなん）
袖にふれけむ　（①二三〇）

※傍書は万葉集（巻十・一九九三）歌と古今歌

関屋

3　あふさかの（うつせみ返し）関やいかなる関なればしげきなげきの中
をわくらん　（②一六二）

若菜下

5　住の江の（紫上）松に夜深くをく霜は神のかけたるゆふかつ
らかも　（③三一五）

7　はふりこか（祝子）木綿うちまがひをく霜はげにいちしるき
神のしるしか　（③三二六）

13　消えとまるほどやは（紫上）経べきたまさかにはちすの露の
かゝる許を　（③三七八）

14　契をかむ（源氏）この世ならでもはちす葉に玉ゐる露の心へ
だつな　（③三七八）

18　あま舟（かんの君）にいかゞは思ひをくれけん明石の浦にいさり
せし君　（③三九一）

通行本文との字句レヴェル以上の相違が少しでもある歌を挙げてみたが、御法巻・夢浮橋巻には相違は無く割愛した。国冬本にはあまり例を見ない傍書の用例でも、例えば掲出した関屋3首目の独自歌句には青表紙本の歌句が傍書されている始末であり、独自歌句を書写はするが、参考歌句など一切

挙げない藤裏葉巻の在りようとは異なっている。若菜下巻5首目、18首目の歌句は他伝本と共通する歌句で当然独自歌句ではない。通行本文若菜下7首目は「うちまがひ」が国冬本では「たちまがひ」になっているが、祝り子の手持つ榊に掛かった木綿と見紛う程の白い霜であったことを「うち紛ひ」と言っているもの。「宇」と「多」が誤写の起こりやすい字母であることも可能性の一つとして考慮に入れておこう。因みに勅撰集では「うちまがふ」は無く、「たちまがふ」は四例ある。こうした通行本文側より国冬本の歌句の方が類例が多くある例は、度々取り上げる藤裏葉巻の「にごりなき世」の件でも同様であり、後に詳細に論じることとして、「たちまがふ」の用例を挙げておく。

建長三年吹田にて十首歌たてまつりけるに　前大納言為家

立ちまがふおなじたかまのやま桜雲のいづこに花のちるらん　（続拾遺和歌集・巻二・春下・一〇五）　大江宗秀

たちまがふ色も匂ひもひとつにて花にへだてぬ嶺の白雲　（続千載和歌集・巻十六・雑上・一六七二）　前大納言実教

百首歌奉りし時

立ちまがふ色はいとはじ山ざくらさかぬたえまにかかるしら雲　（続後拾遺和歌集・巻二・春下・七八）　伏見院御製

題しらず

たちまがふかたこそなけれふじのねやたえぬおもひにくゆる煙は　（新千載和歌集・巻十一・恋一・一一二五）

最後に若菜下巻第13・14首の贈答歌について。まず13首目の「たまさかの」歌だが、歌句としても普通の自立語としても「たまさかに」の方が一般的で多い。この物語自身通行本文は「たまさかに」の自立語の用例はあっても「たまさかの」は無い。ただ両者に歌の意として大差はないであろう。一例のみ「たまさかの」の用例を挙げておく。

初冬恋

たまさかのあふことのはもかれぬれはふゆこそこひのかきりなりけり　（中納言俊忠卿集・四三）

14首目も同様に、大島本の方が〈はちす葉に置く露〉で国冬本はこの助詞が「の」になっている。但し、「に」のなぞりがある。歌の意として変わりはない。以上見てきたように、国冬本の伝飛鳥井頼孝筆のうち、藤裏葉巻以外の巻巻の和歌の様相について、地の文に特筆すべきものを見ないのと同様、歌についても同様のことが言えることが証されたと思われる。

二　伝国冬本藤裏葉巻の和歌の様相

それではいよいよ藤裏葉巻の和歌の独自歌句について順に見ていくこととする。

4　いく返つゆけき秋をすくしきてはなのひもとくおりにあふらん　△

（天理図書館蔵藤裏葉巻　九丁オ5～6行）

九十六番

左　前太政大臣、「紫にかことはかけむ藤の花まつより過ぎてうれたけれども」と侍りけるに　右大臣

いくかへり露けき春を過ぐし来て花のひも解く折に会ふらむ

右　中宮にきこえそめさせ給へりしころ

片敷きに重ねし衣うち返し思へば何を恋ふる心ぞ

（物語二百番歌合（穂久迩文庫蔵藤原定家筆本）・一九一・一九二）

まず「つゆけき秋」の歌について考察する。前述の通り、一首は『物語二百番歌合』入撰歌であり、同歌合では右には狭衣物語の狭衣が、源氏宮に生き写しの式部卿の姫君を秋の有明の月の明かりのうちに垣間見、忘れ得ぬ想いを募らせて詠じた歌が配されている。定家の撰に拠る当該歌合でも「露けき春」という歌句はそのままで、それは藤裏葉巻の夕霧・雲居雁物語が晩春から初夏に掛けて展開しているから至極当然なのだが、「露けし」と「春」という季節の組み合わせから成る「露けし春」に対し、よくよく考えてみると不審であることも又事実である。「露」はおおむね、秋の景物として一般化している。萩や菊に置く露、また木々の葉を紅葉させるものという取り合せ、あるいは消えやすくはかない露が「秋は悲し」の観念と結びつきやすい点からも、「露」は秋にこそふさわしいものとなった」と鈴木日出男氏が述べる如く、[3]露は秋の印象がもっとも強く、歌集を繙いても秋の歌として詠い込まれている例が最も多いとは周知のことだからである。尤も同時に鈴木氏は「しかし、「露」そのものの現象は秋にだけ限ったことではない」と述べ、僧正遍照歌や前章に掲出した若菜下13・14首目の贈答歌を例に挙げ、池の蓮の露を「暑苦しい夏の爽涼の景物」であると同時に「永遠の象徴としての「蓮」とは対照的に、「蓮の露」のはかなさ」も述べている。つまりまず秋、そして夏はあり得よう。次に挙げるのは題「夏草」の歌である。

夏草

露をかぬなつのゝ草のひとゝほりこれや行きゝのふるのなか道　（隣女集（雅有集）・巻三・一〇九八）

しかし「露」と「春」の組み合わせの歌句は『国歌大観』『私家集大成』にも見受けられない。

古注釈はどうだろうか。『紫明抄』『細流抄』は能宣集の次の一首を挙げてこの歌の「こころ也」とする。

としへて消息つかはす人の、むつましくはゝへらぬかり、春のすゑつかたつかはす

いくかへりさきちるはなをすくしつゝものおもひくらす

はるにあふらむ
（よしのふ（西本願寺蔵「三十六人集」）・二〇〇）

この詞書の「としへて消息つかはす人」が、長い間文通だけで間を裂かれたままであったことと、その長の年月を嘆く一首が、藤裏葉巻までの夕霧の、やっと結婚を許され、待ち続けた年月を感無量に詠い上げた、その状況に相通じるものがある故、諸注釈は一首を挙げたのであろうが、「露」と「春」の組み合わせでは無論ないのであり、「露けき春」の歌は依然見受けられない。他に、この物語の和歌を全て取り込み注釈を施している[8]『源氏物語提要』にも「露けき春」への言及はない。

伝飛鳥井頼孝卿筆という方向から追ってもみよう。頼孝の父雅康の歌論書『飛鳥井秘伝集』、叔父雅親の歌学書『筆のまよひ』には（前者は後者を補う部分があるとされる『和歌文学事典』）、次のようにある。

一、露と一字出すも秋也四季に置く物なれとも秋によむへき……
（『飛鳥井秘伝集』大阪女子大学図書館蔵本）

一、露と一字いだすも秋の題なるべし。四季におく物なれども、秋の物にさだめたり。
（『筆のまよひ』日本歌学大系　五）

特段のことを述べている代物でもないが、伝承筆者の周辺も秋の題材と定める「露」と秋の結びつきを強く打ち出す。というより当り前の伝統と定石のうちにあると言えようか。すると国冬本藤裏葉巻の当該一首はごく標準的な歌句で出来ており、一方通行本文の側は極めて独自の歌句であると述べることが出来る。

但し歌句として「露」と「春」が結びついているものが無いとはいっても、春の季節の中に「露」が詠み込まれている例はある。次の俊成卿女家集の「衛門督とのへの百首」のうち、題「春」の歌などがそれにあたる。

春
露なからすみれつみにとなけれとも野をなつかしみぬるゝそてかな
（俊成卿女家集・五七）

傍線部は秋と強く共起する言葉だが、春の歌としてある。

歌集を中心にみてきたが、散文に於いてはどうか。中世の物語をみると、「露けし」あるいは「露しげし」などは『いはでしのぶ』『夢の通ひ路物語』に多く散見される（『鎌倉時代物語集成』より）。このうち『夢の通ひ路物語』は専ら「露」は秋の景物として描出され、次の如き正に「露けき秋」の歌まで出現する。

おみなへししほるゝ野辺は大かたの露けき秋に詠ましかわ（ば）
（『夢の通ひ路物語』四　35ウ）

※五句目ママ

これに対し、『いはでしのぶ』には以下のような春の場面がある。

しのばれぬ心の人わろさも、かつはあぢきなければ、一

えだおらせて、大納言の君のもとに、

「おも(風春下)ひいづる人もあらじをふるさとにわすれぬ花の色ぞつゆけき

ちるをや人の」とあるを、かの院にも、のどやかなる春のながめには、さすがおもひやみにし人のうへも、おり〳〵、たゞにしもいかでかあらん。ひめ君の、おかしげにおよすけ給につけても、わか君の御事はわすれがたう、かつめのまへなりしをりは、はづかしきよりほかに、おもひわくことなりしかど(か脱)、げにみねば恋しうあるものにこそと、なべての世のならひもうらめしうおぼしつゞけられて、

うしとみし人ものきばにふりゆけば袖にしのぶの露ぞひまなき

など、ならひすさみておはしますをりしも、ありつる花の枝をもてまいりたるに、げにあはれならずしもなければ、いまさらかひあるべくもあらずかし。さるは、

わするべきつゆのかことかはなざくらあだにも人をなにうらむらん

とは、げに風のつてにてもいはまほしう、むげになさけなうおぼしゝらるれど、……（以下略）

（『いはでしのぶ』二　123オ～123ウ）

のどやかな春の情景の中でそれぞれの物想いが交錯する中、花（桜）と「露」が場面を彩っている。以上能宣集、俊成卿女家集から『いはでしのぶ』まで春の「露」の例を見てきたが、稀少ながらこのように用例はあり、この場合の「露」は秋の景物としてのそれではなく涙の粒であろう。ただ秋の用例が多く一般的であるが故に、春に「露」が描出されることに違和感が残るのである。すると、当該国冬本藤裏葉巻の一首の問題の歌句は、そうした〈違和感〉に因って、当該巻の春という季節とは異なり、それ故誤謬としかいいようのない「秋」が書写され来たものなのであろうか。ただこの〈誤謬〉という言葉の使用については、その最も素朴な要因＝誤写から、最も複雑多岐な理由を有する〈変容〉[7]に至るまで、本文研究をする上で慎重を期すべきであるのは言うまでもない。以下の片岡利博氏が簡潔にして明快に述べる如くである。

文学に関するあらゆる学説の当否を判定する最終的な根拠は「本文」でなければならない。文献学とはそういう学問であろうと思う。その意味では、我々の前に存在しているどんな本文にも「誤謬」などということはありえない。我々にとって解釈しえない事象が本文の中に存在しているからといって、それを誤謬であるとするのは、本文以外のものにプライオリティを認めることになるから、私はそのような考え方をとらない。[8]

目前のありのままの本文の姿が享受され伝来してきたことを尊重し、それをそれとして受け止める態度を基本として、蓋然性の高い解釈に辿り着く努力を順々にしなければならない。

この考えに従ってどうして「春」とあるべきところが「秋」と残ったのか考えていこう。まず二つの字の誤写は起こりにくい字母であり、加えて物語の季節が晩春辺りの事と巻中に明記してある（「やよひの廿日かあまりの程こ大宮の月き日にて」天理図書館蔵国冬本藤裏葉巻2丁オ4～5行）となると誤写の可能性は極めて低いと言わざるを得ない。すると次に、その可能性を排除した上で今日までの何れかの時点（それは無論複数あると巷間伝わる式部自筆本を起点としている）で「露けき秋」が伝本中に現れた理由を考えなければならず、そこで想起すべきは、通行本文側の歌句「露けき春」が、ここまで論じ来た如く独自性の強い表現であり、一方国冬本側の「露けき秋」は極く一般的な和歌的表現であるという相違点である。第一節国冬本・若菜下巻7首目の箇所でも同様のことを述べた。ことばと性差の観点から、通行本文に拠るこの物語が和歌の世界に於いて独自の世界を持つことを説く近藤みゆき氏の論もあり[9]、通行本文はまさに「源氏見ざる歌詠みは」と称される如く、歌人たちを惹きつける独自の新世界を次々と展開していったのだった。対して国冬本藤裏葉巻は、あくまで伝統、定石の世界に留まろうとする。このことをまず一首目に確認しつつこの歌の答歌となる次の歌の考察に進むこととする。

5　たをやめのそてにまかへるふちのはなおる人からや
　　色もまさらむ　　○　　（同　九丁オ8～9行）

この歌は通行本文では傍線部が「見る」で、状況はいよいよ頭中将（藤裏葉巻では内大臣）が夕霧と雲居雁の仲を許すことを決めて長男柏木を使者に夕霧を我が家の藤花の宴に招き、許された夕霧が感激して詠じ（前述歌）、それに応えた柏木が詠じたものである。この夕霧の結婚に際しては、藤の花が美しく場面を彩る。内大臣が「順和歌（ずむのわか）」の最初に夕霧の盃に藤の花を手折って与えたことで結婚を許す場面については、〈花を折る〉行為に女性を我が物にすることの比喩があることが『和漢朗詠集・恋』の「請君許折一枝春（請ふ君一枝の春を折ることを許せ）」や古今集の僧正遍昭の二二六番歌「名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな」の例等よく知られたことであり、この物語では宿木巻の今上帝が薫に女二宮を許す場面にも現れる。

ところで、既に柏木が使者となって夕霧を訪れたときの贈歌の趣向は、

　　けにいとをもしろきえたにつけたまへり
　　（同　四丁ウ4～5行）

というもので、内大臣邸の藤の枝が添えられていた、―つまり藤は既に手折られていたのであった。そして注（3）でも掲出した独自本文「はなやかにふさおもしろきをおりて」

（同　八丁ウ8行）で盃を前に再び藤の房が折られる。藤が何度も折られる行為に内大臣の真の許しの思いが込められていると共に、〈手折られる藤〉に雲居雁が象られていた。この上また歌で「おる」のは冗漫な印象があり、また実兄柏木が「おる人」と詠うのはあけすけで、更に『源氏物語提要』が「夕霧の見給ふには色のまさらんの心也」と注するように、この「見る」はもちろん結婚の意であり、即ち通行本文に拠れば、夕霧と結ばれて雲井雁は一層美しさを増すであろうと、現在から未来をも寿いでいるのである。それに対して「おる」は現時点での女性の獲得の象徴であり、こうした相違が通行本文と国冬本には見られる。

国冬本がこうした表現で在ることの理由を考えてみる。一首は先の「つゆけき春」の答歌であることから贈歌との関連をみてみると、一つの共通点が見いだせる。それは贈歌がそうであったように、答歌も和歌の伝統的な表現を保つところがあるということである。〈花を折る〉という表現なら表現に固執しそれを繰り返し用いるあり方。こうした歌への独持の強い拘りに拠って、国冬本藤裏葉巻の世界が成り立っているということは言えよう。

10　かさしてもたとらるゝ草のなはかつらをまちし人や
　　しるらん　　（同　十八丁ウ1～2行）

次の歌は、雲居雁と新婚後で、関係が遠ざかりつつあった藤典侍と再会し夕霧が送った歌への藤典侍の答歌である。通行本文「桂をおりし人」（③一八八）が国冬本では「まちし」になっている点が注目される。「桂を折る」は『晋書・郤詵伝』の「桂林一枝」の故事、また『蒙求』にもあり、本邦の『菅家文草』（旧大系　明暦二年藤井懶斎奥書三冊青表紙本・校注者川口久雄氏架蔵）「絶句十首、賀二諸進士及第一」（巻二）の内の「賀二多信一」に「手捧芬々桂一枝」、「寄二紙墨一以謝二藤才子見レ過」（巻四）でも「詠折春風桂一枝」などが散見し得、藤典侍が「くるまにのるほとなれと」（天理図書館蔵国冬本少女巻　十八オ10行）という忙しい時間のうちに即興で歌に詠み込むほど人口に膾炙した、官吏試験に及第したことを指す漢籍の成語である。『河海抄』は「桂をおりし人（折桂文章生事也）」と注し、拾遺集の道真元服の際の歌（四七三　久方の月の桂も折る許家の風をも吹かせてし哉）を引いている。

一方国冬本では「かつらをまちし」になっている。こうした成語は無論無い。複製を見比べてみると「利」と「知」の誤写の可能性はあろうが、やはり一字目は「まちし」としか読めないところである。夕霧は及第しているのであるから（「大かくのきみそのひのふみかしこくつくり給てしゝうになり給ぬ」（同国冬本少女巻17丁ウ9～10行）、「待つ」のは不審であるし、「桂を折る」で一つの成語であれば、単独では意味を成さない。すると結論として「かつらをまちし」という書写

が国冬本に在るのは、この成語が未知のものであったか、少女巻の内容を認知していないような書写者の状況が産み出したという事以外では、あり得にくい現象であると言わざるを得ない。後に触れるが、夕霧の進士及第を描いた国冬本少女巻は大きな欠如部分を有する伝本であるが、現存部分に及第のことは書かれているので、本そのものの状態で左右されたとは思われない。ただ藤裏葉巻を含む室町末期本は、複数人で分担して書写されたのであるから、少女巻の本の状態に関わらず担当範囲以外の本は目にしていない可能性が高いであろう。すると次に考慮すべきは少女巻の内容を認知していなかった書写者の可能性についてであるが、源氏物語の書写を依頼され、飛鳥井頼孝の名が冠される程の者が内容を熟知していないということがあるだろうかという疑問も湧く。起点からそういう本なのか享受史の過程の中で〈変容〉が起きた故のことなのか判別はしかねるので、あくまで眼前にある国冬本藤裏葉巻はそういう伝本であるという現実を指摘するに留めておこう。宗教学者田川建三氏の「学問というのは、残念ながらこれ以上はわからないよ、ということを正直に明らかにするのが仕事なのだ」[10]と述べる言葉に則ることとする。

最後に書写者の漢籍受容の様相から「かつらをまちし」の問題を検討してみよう。国冬本は巻によって漢籍の素養を疑わせるものもあり、一例が少女巻の、

まことのほたいをむつひみたのゆきにほうし

（天理図書館蔵国冬本少女巻　七丁オ5～6行）

の部分で、この文意不明の一文は通行本文の

窓の螢を睦び、枝の雪を馴らし

（②二八五　典拠は晋書・車胤伝と晋書・孫康伝）

の、家が貧しく蛍の光や雪の明るさの中で学問した車胤・孫康の著名な故事の書き下し部分であり、つまり少女巻はまるでこの故事を認知しなかったことになる。

このような状態のものもあるが、一方で正確に漢籍受容がなされていると思われる巻巻もあり、全体を概観し精査するのは今後の課題とするとして、伝承筆者毎、この度は伝飛鳥井頼孝筆の六帖の漢籍故事の書写状況を調べてみたが[11]、その結果漢籍が表記などの相違を除き正確に引用されており、当該「かつらをまちし」のみが孤立例であることが判った。よって、以上当該一首については、この成語を認知されずに成された書写状況が十分な検証を経ぬまま享受史のうちに継続し今日に至った故と結論づけておく。

18　むらさきの雲にまかへるきくの花くもりなきよのほかとそ見　（同　三十丁ウ10行～三十一丁オ2行）

最後の一首は注（3）でも掲出し、本稿第一章冒頭にも挙げた「くもりなきよ」の一首である。注（3）で簡単に記したが、「ほ」と「か」は続いて書写されているが、これでは

意が通じないので「し」を挿入して通行本文と同じ「ほし（星）」がここにくるべきであろう。

さて前述の第10首は漢籍の問題であり、この一首を除いて前述の4・5首と当該歌をみるに共通する特徴がある。先にまとめたが、和歌の伝統的な在りようへの強い拘りに拠って、国冬本藤裏葉巻の世界が成り立っているという特徴を当該一首も担っているのである。国冬本歌句「くもりなきよ」と通行本文「にごりなき世」を比較するに、中古から中世にかけて前者が明らかに多いということである（「くもりなき」単独の歌句だと更に量は倍増する）。中古一首・中世二首を挙げる。

かゝみのやま

くもりなきよにしあへれはかゝみやまみかきこそませ人の心も　（能宣集（書陵部蔵「三十六人集」）・二四七）

九条院中宮と申しける比、三条殿におはしまして、その御方にて人人月歌よみ侍りける時　大納言成通

さもこそはくもりなき世の月ならめみる人さへもすむ心かな　（『新続古今和歌集』巻四・秋上・四五四）

きみがあたりさらぬかゞみのかげそひてくもりなき世を見るがうれしさ　（『雲隠六帖』三　1ウ）

「くもりなき」「にごりなき」は類似表現と見えそうで、異なる部分がある。前者は基本的に天地の情景の鮮明さを意味し、そこから意が展開し行く（不正無きこと等）が、後者は邪念・煩悩・穢れの無い様そのものを意する。そして〈煩悩〉のような宗教がらみの言葉は、時代が経るに連れて、末法の世の到来、「濁りなき世」から「濁る世」の歌句を増やすこととなる。

駒迎

せきみづのかげもさやかにみゆるかなにごりなき世のもち月のこま　（文治六年女御入内和歌・一八三・定家）

山家水

濁る世をそむくとなしに山水の清き心のすむにまかせむ　（権大納言言継卿集・二四二）

源氏物語内部に目を向けてみると、「濁り」「濁りそむ」「濁りなし」「濁る」等自立語十三語のうち、藤裏葉巻の当該一首を除いて全て歌でなく地の文に出現し（引歌表現一つを含む）煩悩や穢れを現しているのに対し、「曇りなし」十五語のうち、初音の正月の源氏・紫上の贈答歌など、「くもりなきよ」は無いが歌句「くもりなし」の歌は三首ある。

こうした二つの歌句の通事的在り様、加えてこの物語内部での在り様を考えると、通行本文の藤裏葉巻の一首の「濁りなき世」は、藤裏葉巻という栄光の大団円のうちにありながらも、崩れゆく貴族社会が透かし見られる歌句であり、国冬本はそうしたものを持たない、やはり〈多数派〉の歌句の世界に身を置く在り方を選んでいるのである。名家飛鳥井家出身者を筆者に冠する当該巻は、名門故に伝統の呪縛の内に踏み留まった結果と言うべきであろうか。

三　残された問題――室町末期書写本藤裏葉巻の〈国冬本としての刻印〉

以上歌句を中心に藤裏葉巻について検討して来たが、それにしても同一の伝承筆者の書写本六帖のうち、一つ藤裏葉巻のみどうして突出して独自本文をもつこととなったのか。藤裏葉巻が所謂第一部の大団円故に、物語の終焉とは最終的な雌雄を決する場であるから、「読者＝書写者の情緒的な思い入れ」[12]が過剰にあり、それがこの一帖に現れたということが一つ考えられては来る。しかしそうすると注（3）でも少し触れたが、幻巻は畢竟〈亡骸同然の光源氏の日常の月次屏風絵的一年記〉であり、その直前の御法巻という〈実質上〉の第二部の終焉の巻に頼孝筆とされながら特筆すべき字句レヴェル以上の独自本文の見られぬこと（因みに幻巻そのもの（伝春日社家祐範筆）も国冬本の独自本文は見あたらない）、そして何よりも源氏物語の最終的な大団円夢浮橋巻も同筆本とされるが同様の状況であることから考えて、藤裏葉巻のみに本文のヴァリエーションが設けられた訳は、近代に入って昭和三年与謝野晶子氏が「私は『源氏』を前後二編に分けて、「若菜」以下の諸巻を後編とし、それを他人の補作であると推定している。（中略）『源氏』は結構より見てこの「藤裏葉」に至り、前編の主人公　源光（みなもとのひかる）　の境遇がすべて円満にめでたく栄華の頂点を見せて筆が結ばれている」[13]と述べた理由に近いものがあった故かもしれない。少なくとも藤裏葉巻書写者にとって幻・夢浮橋巻とは、昭和二十四年に池田亀鑑氏によって提示された所謂「三部構成説」という近代の産物である枠組みとは全く別なものとして映じていたようである。

思えば、伝国冬本源氏物語とは、我々の知るのとは異なる分岐点でこの物語を分かつ性質があった。桐壺巻での「さとのとの」「かゝるところにおもふやうならん人をくしてすまはや」（『本文研究　1』31ウ）以来松風巻辺りまで、源氏の拠り所として東の院の増築など徐々に玉の台を磨く様に整えつつあった二条院構想が変貌を遂げ、少女巻に六条京極辺りの故六条御息所邸辺りに、四町を占めて大邸宅が創設され、「いける仏のみ国」（『源氏物語別本集成』分節番号230046～230058）によって終わりのない栄華が描かれゆくのが通行本文の源氏物語の世界であるが、国冬本に於いては少女巻で「二条京極わたりに良き町を占めて古き宮のほとりにつくらせ給へり」（天理図書館蔵　十八丁オ11行～十八丁ウ2行）と、邸宅は古くからの構想通り二条にその完成体を現したのだった。[14]尤もこの〈二条院創設〉は少女の巻のみの話で、国冬本の以後の巻ではこの少女巻の記述は恰も存在しなかったかのように、六条院の世界が結局は描出されているのではあるが、少なくともこの国冬本少女巻で「二条院栄花の物語を結実させ」[15]〈一つの区切り〉が実現し、我々の見知ることがなかっ

た〈源氏物語の別の物語世界〉を垣間見ることが出来るのである。

更に二千円札の裏側に国宝源氏物語絵巻・鈴虫Ⅱと同詞書（東京　五島美術館蔵）が一部引用されたことから一躍脚光を浴びた鈴虫巻は、国冬本に於いても近年最も注目を集めた巻でもある。長文の独自本文、特に五三九字にも及ぶものが指摘され、またその内容も留意すべきものであったからである。伊藤鉄也氏は五三九字の独自本文について以下のように述べている。

この異文の特徴は、文字数において長いばかりでなく、また話題転換部分である以外に、この異文の中に七人もの人物が登場していることである。そこには、女三宮・薫・光源氏・小侍従君・柏木・夕霧・一条御息所の動静が語られるのである。（中略）こうした人物の「鈴虫」のこの場面での登場は、どのような意味を持つのであろうか。私は、物語作者が、ここでひとまず筆を擱いた時の本文の姿を伝える異文ではないか、と思っている。第二一巻「少女」や第三三巻「藤裏葉」において、登場人物の多くが呼び出されていたことに思いを致すからである。[16]

実は通行本文に於いても、鈴虫の巻を所謂第二部の統合点の巻と位置づける意見はあった。楢原茂子氏は、

秋山虔氏が柏木女三宮物語と第一部以来の源氏の一生を統合してその位境を象徴的に語る重要な巻と位置づけられたように（『源氏物語』岩波新書　昭和四十七年）、紫の上の死、「幻」巻終結に向かって源氏の一生はこの短い「鈴虫」巻で集約され統合される。

と述べている。[17] となると国冬本は、この鈴虫巻の統合的性格を更に明確に持つものと言えよう。

但しこの鈴虫巻で総花的に挙げられた七人のうち、例えば女三宮には、通行本文には描出されることのない〈人間的成長〉が見られ、[18] 柏木も、独自本文が、悲劇の貴公子の叙事詩としての柏木巻の終結を許さず、[19] そこから生じるそれぞれの人物論乃至は巻論は我々に、かような〈別世界〉が存在することを劇的に認識せしめるものであったし、その意味では先述の少女巻の〈別世界〉も同様であろうが、藤裏葉巻はこれらの巻巻と異なり、文意に関わる字句レヴェル以上の独自本文をもつものの、人物論や巻論として総括できるほどのものを持たない。この差は、

少女・柏木・鈴虫巻　……　伝津守国冬筆本
藤裏葉巻　……　伝飛鳥井頼孝筆本

に因るとも言える。稀少な鎌倉一筆であるという国冬筆本はこの意味でも更なる考察が求められるところであろう。但し国冬の鎌倉一筆と伝えられる十二巻十二冊にも若菜上巻のように青表紙本系統本の伝本で特段の独自本文を持たない一巻もあり、決して早急且つ軽々に一筆本を総括することは出来

ないこともまた事実である。一方、注（4）岡嶌偉久子氏は伝日比正廣筆絵合巻が全丁、伝同正廣筆夕顔巻が一丁～二十一丁あたりまで伝国冬筆の臨模風であることを指摘し、そうした点も含めてかつて一筆の国冬本源氏物語五十四帖の存在が在った可能性を主張している。元々国冬筆鎌倉末期本十二巻を補う形で、五十四帖に足らない正に四十二という数字の巻が書写されたのであろうことを考えても、この可能性はかなり高いものであろう。そう考えていくと、鎌倉末期一筆本と室町末期混成筆者本という形で分けて論じていくよりも、書写期に関係なく一巻ずつ乃至は同一書写者本毎に検証・考察をし続けるのが有効な方法と思われる。

本稿で論じ来た藤裏葉巻をみても、その考えは一層強化されるはずである。何故ならば、伝国冬本の特徴言わば〈刻印〉として、先学の論考をまとめ、〈中心より周辺に目配りをし、源氏を支える人々にスポットを当て、しかもその周辺の人々の側に立った視点をもつ〉と述べた点（注（18）拙稿より）が、室町末期本のこの藤裏葉巻にも見出されるからである。それは注（3）資料⑥⑦に挙げた冷泉帝の源氏への、より強調された恭順の描写である。ここに今一度通行本文と並べる形で掲出してみよう。

【国冬本】

かうてもあかすのみ御門はおほしてよの中をはゝかりつゝくらゐもえゆつりきこゑ給はぬ事をあさゆふの御けなきくさなりける　（天理図書館蔵　二十四丁ウ4～7行）

※「な」は補入

【大島本】

かくても、なを飽かずみかどはおぼして、世の中を憚りて、位をえ譲りきこえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。　（③一九三）

【国冬本】

御門はなをかきりあるをや〳〵しさをつくしてえみせたてまつらぬ事のみなんおほしける　（同　二十九丁ウ4～7行）

【大島本】

みかどはなを限りあるいや〳〵敬しさを尽くして、見せたてまつり給はぬことをなんおぼしける。　（③一九六）

国冬本藤裏葉巻の冷泉帝は、実父源氏に本当の子としての恭順と献身を出来ぬことをのみ、そのことばかりを嘆いている。「をや〳〵しさ」（「親々しさ」か）という言葉は未知の語だが、「ゐや〳〵しさ」（礼儀正しさ、うやうやしさ）という固い言葉に対し、親と子の生の感情を感じさせる。太上天皇に準じる位を与えても尚現しきれない親子の情。稀少な相違ではあるが、国冬本藤裏葉巻は通行本文より、一層強い〈源氏を支える人々の一人〉冷泉帝の思いを感じさせるものがある。

思えば冷泉帝が源氏に位を譲るなり官位を上げるなどの形を取って、真の父に尽くそうとしたのは、これ以前にも、初

めて源氏が真の父であると知った薄雲巻、源氏が後見する梅壺女御を立后させ、源氏を太政大臣に昇進させた少女の巻がある。しかしこのうち少女の巻の当該部分は欠如しているので、[19] 薄雲巻を見てみよう。

【国冬本】
くはしうそうするをきこしめすにあさましうめつらかにておそろしうもかなしうもさま〳〵に御心みたれけり
（『本文研究　5』　27ウ）

【大島本】
くはしく奏するを聞こしめすに、あさましうめづらかにて、おそろしうもかなしうも、さま〳〵に御心乱れたり。
（②一三四）

これは夜居の僧都から初めて真相を聞かされたときの冷泉帝の反応である。通行本文と変わるところはない。

【国冬本】
おとゝのかくたゝ人にて世につかへ給もあはれにかたしけなかりける
（同　29オ）

【大島本】
おとゞのかくたゞ人にて世に仕へ給も、あはれにかたじけなかりける
（②一三五）

これも同様に父源氏の位が自らより低いことを恐縮する場面。

【国冬本】
きこしめしゝ事のゝちはまたこまかに見たてまつり給つゝことにいとあはれにおほしめさるれはいかてこのことをきこえはやとおほせとさすかにはしたなくもおほしぬへきことなれはわかき御心ちにつゝましくてふともえうちいて給はぬほとはおほかたのこととともをつねよりことになつかしうきこえさせ給
（同　30ウ～31オ）

【大島本】
聞こしめしし事ののちは、又こまかに見たてまつり給ふつゝ、ことにいとあはれにおぼしめさるれば、いかでこのことをかすめきこえばやとおぼせど、さすがにはしたなくもおぼしぬべき事なれば、若き御心ちにつゝましくて、ふともえうち出できこえ給はぬほどは、たゞ大方の事どもを常よりことになつかしう聞こえさせ給ふ。
（②一三七）

ほんの少しでも自分が実の父を知ったという事実を知ってもらえたら、という箇所だが、通行本文との差異はない。以上見てきたように、冷泉帝の源氏への親子の情の強調の描写の国冬本の独自本文は藤裏葉巻にしか見られない。薄雲巻の伝承筆者が鳥居小路経厚で頼孝ではないので、伝頼孝筆の書写本が僅かに出張していた独自の冷泉帝像は藤裏葉巻以降発展することなく終わっている。

終わりに

以上、国冬本藤裏葉巻を中心に考察してきた。確かに前述の如くこの巻は、人物論としても巻論としてもまとめられるものを持たず、様々な問題が散見し得ることを確認しそれぞれに固有の方法で意味を探るしかない巻ではある。しかし一つの像を結ばぬけれども、個々には重要ないずれ各々解決せねばならぬ問題を抱え眼前にあるこの巻の、ありのままの姿を尊重し賢しらな解釈を附加せず、源氏物語の〈ある一つの藤裏葉巻〉の諸様相をここに提示する。

注

(1)伊井春樹・伊藤鉄也・中村一夫・中川照将・加藤昌嘉・新美哲彦氏等の諸論考。

(2)伝国冬本は天理図書館蔵の写本複製、『本文研究』(和泉書院)の翻刻(伊藤鉄也・岡嶌偉久子作成)、『源氏物語別本集成』及び『源氏物語大成』に拠った。何に拠ったかはその都度明記した。傍線など私に表記を改めたところがある。尚掲出箇所は原則として独自本文箇所のみを中心に取り扱い、他本文に同様及び類似の箇所がある場合は、※を附して明記した。伝国冬本の対照本文としては、現行で最も通行する本文がその差異の提示に最適との考えから、大島本を出来得る限り忠実に活字化した『岩波新大系本』を選択した。アラビア数字は巻数、漢数字は頁数である。表記・傍線など私に改めたところがある。適宜『大島本源氏物語』(古代学協会編　角田文衛・室伏信助監修　角川書店)の複製から、傍書・書き入れ等を抜き出した。

(3)拙稿「影印本を読む—国冬本「梅枝」「藤裏葉」巻」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識　梅枝・藤裏葉』(河添房江編　至文堂　平成十五年十月)。尚、作成にあたって渋谷栄一氏の御協力を得た。ここに記して深甚の謝意を表する。

(4)岡嶌偉久子「源氏物語国冬本—その書誌的総論」(『ビブリア』百号　平成五年十月)。伝国冬本研究の基礎文献である。

(5)『源氏物語歳時記』(ちくま学芸文庫　平成七年十一月)三三九頁

(6)伊井春樹編『源氏物語　注釈書・享受史事典』(東京堂出版平成十三年九月)二九八頁

(7)ここで〈変容〉という現象を現す言葉を用い、本文研究に於いてよく用いられる〈改変〉を用いなかったのは、未だ国冬本現形態がどのように成ったかその過程が不明で、国冬本は、故に通行本文と見比べた場合独自の表現等が見られる場合でも、それが国冬本の親本に因るもので現国冬本に単純に引き写された故のものか、それとも現国冬本の段階で発生した独自表現か判別せず、現象面の指摘に留める他無いという理由に因るものである。尚この辺りは加藤昌嘉氏の御意見に拠るところが大きい。記して謝意を表する。尚本稿校正中に『文学・語学』178号(平成十六年三月)の、正に『改変』の語に拠る後藤康文氏の稿者への御批評を知り得た。重く受けとめさせて頂いたことを記しておく。

(8)『物語文学の本文と構造』和泉書院　平成九年四月　はじめに(2)〜(3)頁

(9)「nグラム統計処理を用いた文字列分析による日本古典文学の

研究―『古今和歌集』の「ことば」の型と性差」（『千葉人文研究29』平成十二年三月）の後注22より。近藤氏はここで女郎花を取り上げ、平安時代全般に多く歌中に詠まれた中、女性による女郎花詠が驚くほど少ないこと、その理由としてこの花が男性本位のセクシャルな視線を内在させるものとして女性に厭われたからと解く。その上で氏は「特異なのが『源氏物語』である。源氏では、無論男性側の用例は多いのだが、女が、贈答に応えたものではなく、あえて自らを喩えて男に詠みかけた例がある。野分巻の玉鬘（自分を喩える）、夕霧巻の一条御息所（娘を女郎花に喩える）である。前者は源氏の懸想をかわそうとする玉鬘の歌、後者は娘の運命を案じ、病を押して母御息所が夕霧に送った手紙の歌である。特殊な状況下、その特殊性を象徴するかのように、性差と「ことば」の古今的秩序を破った詠歌がなされる訳である。『源氏物語』では、性差とことばの古今的な秩序に反する歌が、他にも散見し、その点でも、他の物語の和歌とは異なっている」と述べている。

(10)『書物としての新約聖書』（勁草書房　平成九年一月）三八八頁

(11)調査は『小学館新編日本古典文学全集』の各巻巻末「漢籍・史書・仏典引用一覧」（今井源衛作成）と古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語』（桜楓社　昭和三九年）の「巻別・典拠詞句一覧」により行った。尚後者の一覧に拠れば伝頼孝筆本六帖の漢籍引用数は二十を数える。

(12)加藤昌嘉「本文の世界と物語の世界」（『源氏物語研究集成13』平成十二年五月）一八五頁

(13)「紫式部新考」（『日本文学研究資料叢書　源氏物語（一）』（有精堂　昭和四十四年十月）

(14)このことについては平成十五年十二月七日全国大学国語国文学会　第88回大会研究発表会（於　大阪大学吹田キャンパス）にて「源氏物語の別本の物語世界―国冬本少女巻を中心に」と題して口頭発表した。別稿で詳述することとする。

(15)伊井春樹『源氏物語論考』（風間書房　昭和五十六年六月）

(16)『源氏物語本文の研究』（おうふう　平成十四年十一月）九一頁　二八八～二八九頁

(17)「「鈴虫」巻への凝集」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識　横笛・鈴虫』永井和子編　至文堂　平成十四年十一月）一五四頁

(18)拙稿「国冬本における女三宮について―鈴虫の巻を中心に」（『国語国文』平成十四年二月）

(19)このことについては平成十五年九月二十日　物語研究会第285回例会（於　立教大学）にて「国冬本源氏物語を読む―柏木巻と柏木物語を中心に」と題し、同年十二月十三日大阪大学古代中世文学研究会第155回例会（於　大阪大学）「国冬本の柏木衛門督について」と題して口頭発表した。別稿で詳述することとする。

※『源氏物語』以外の作品の本文引用については、勅撰集・文治六年女御入内和歌は『新編国歌大観』、私家集は『私家集大成』、物語二百番歌合は『王朝物語秀歌選　上』（岩波文庫　昭和六十二年）、『夢の通ひ路物語』・『いはでしのぶ』・『雲隠六帖』は『鎌倉時代物語集成』にそれぞれ拠った。なお、引用文中の傍線は稿者が私に附したものである。

（こしの・ゆうこ　本学大学院博士後期課程）